

## 障害状況 (breakdown) からの存在論

——ハイデガー『存在と時間』における存在と無との関係について——

松本直樹

### 序論

ハイデガーの存在思想を理解するために、存在者との関わりが何らかの意味でうまくいかなくなる事態、英語圏の解釈者たちがしばしばブレイクダウン・コンディション (breakdown condition) ——あえて訳すなら「障害状況」——と呼ぶ事態を参照することは重要な意味をもっている。このような指摘がなされること自体は、とくに最近では決して珍しいことではなくなった。しかし、そもそも何故にこのような考察の手續ぎが重要であるのかについては、じつは必ずしも十分には明らかになっていない。

たとえば、ハイデガーは『存在と時間』第一六節で、人間、つまり現存在にとって最も身近な存在者である道具が壊れる、足りない、余計なものになるという事態を分析している。ブレイクダウン状況の重要性を強調し、この個所を引き合いに出す論者の多くが、しばしば『存在と時間』の後半、つまり第一部第二編を軽視するのは奇妙なことである。というのも、ハイデガーは『存在と時間』刊行直後の一九二七年夏季講義において、同じ事態を分析の主題としながら、この問題が存在と無との「相属 (Zusammengehörigkeit)」(GP43) という、存在の間にとっては最も根源的な事態に関わることを明言しているからである (GP42f)。言うまでもなく、『存在と時間』の後半は、実存にとっての端

的な無である死という現象を取り扱っている。それゆえ、ブレイクダウン状況の重要性を強調しながら『存在と時間』の後半を無視することは、そもそも筋が通らないのである。

たしかに、このような立場をとる人々にも言い分はある。『存在と時間』第一六節は、しばしば、諸道具との実践的な交渉が停止したあとに観察的・理論的なふるまいが派生してくるにしたがって、諸道具が純粹な自然物を典型とするようなたんなる事物へと変換していく過程を記述したものととして理解される。存在や認識についての伝統的な諸理論が様々な困難に陥ってきたのは、それらがこのような、いわば非常事態においてのみ出現する存在者のあり方をもとに存在や認識を解釈し、現存在が諸道具との実践的な交渉にスムーズに没頭しえている日常的なあり方を不当に無視してきたからなのである。

このような見方からすれば、『存在と時間』の後半を重視しないことは、もちろん完全に首尾一貫している。たとえば、この種の解釈の代表的な担い手であるドレイファスは、ハイデガーが『存在と時間』の後半で力説するような死の不安は「現存在が気づかない (care [|| Sorge]) として本当のところであるかを露わにしない」と述べている。<sup>(1)</sup> というのも、不安は世界内存在としての現存在の活動を全面的に停止させてしまうがゆえに、現存在にとってはまさに「究極のブレイクダウン状況 (an ultimate breakdown condition)」<sup>(2)</sup> に他ならないからである。

こうして、『存在と時間』におけるハイデガーの業績は、ひとえに現存在の「日常性の解釈学」<sup>(3)</sup> にあることになる。ここでは、無についての議論は、存在や認識の非本来的な解釈が派生するプロセスを明示するという消極的な意味しかもちえない。それゆえ、『存在と時間』を一貫してプラグマティズムの立場から解釈するゲートマンは、ドレイファスよりもさらにあからさまに次のように言う——たしかに、人間が自らの死に直面しつつ単独化された自己自身に表明的に向かい合うことはある。しかし、そのような事態はごく限られた特殊な状況においてのみ生じるのであって、それを哲学的な基礎づけ作業の出発点と見なしたところに伝統的な主観性の哲学の致命的な誤りがあったのである。「ハイデ

ガーにとつては、むしろ人間の実存の『非本来的な』形式こそが常態的な形式である。この常態的な形式を、主観性の哲学者たちはこれまでつねに見落としてきた<sup>(4)</sup>。

驚くべきことに、ここでは本来性と非本来性という実存の二つの様態の区別と関係をめぐるハイデガーの主張が完全に逆転されてしまっている。というのも、ハイデガー自身はまさにゲートマンが言う「特殊な状況」においてこそ、『開示されるべき『対象』についての根本経験』(332)が可能になると考えていたからである。

このように、『存在と時間』でブレイクダウン状況が取り上げられる意味をどのように理解するかという問題は、『存在と時間』の全体をどのように読むかという問題に直結している。そこで私は、このブレイクダウン問題の意義を、ハイデガーが実際にブレイクダウン状況を取り上げて主題的に考察している『存在と時間』の二つの箇所を手がかりとして明らかにしてみたい。一つはすでに言及した第一六節、つまり「世界内部に存在するものにおいて告知される、環境世界の世界的性格」と題された節である。もう一つは「現存在の際立った開示性としての、不安という根本状態性」と題された第四〇節である。

不安や、ひいては死の問題を考察するのに、『存在と時間』の後半ではなく、前半に属する第四〇節を選んだのは、この節が後半の議論を簡潔に先取りしているのみならず、ブレイクダウン状況が含意する事態をきわめて明瞭に提示しているからである。他方、ハイデガーは第一六節を、「現存在の日常的なあり方のうちに世界の構造を明瞭に目撃するような可能性を見出しうるか」という趣旨の間によってはじめている(32)。つまり、この節における考察はあくまで現存在の日常性を標的としており、そのことによって自ずと限界を定められてしまっているのである。ここでの考察の本当の意味を理解するためには、私たちはこの節を、たんなる「日常性の解釈学」を超えた『存在と時間』全体の意図に照らして捉えなおさなくてはならない。この捉えなおしによって明らかになるのは、『存在と時間』における「ブレイクダウン(障害)状況からの存在論」でも言うべき思想である。

また、私の考えでは、このブレイクダウン問題は、『存在と時間』という著作全体の構想と限界をある観点から明確にするためのよい手がかりになる。私は本稿において、ブレイクダウン問題の検討を通して、『存在と時間』という著作が少なくともその一つの目標を達成することに失敗していると主張したい。すなわち、『存在と時間』においては、存在の間は未だハイデガー的な意味での超越論的 (transcendental) な問としては確立されていないのである。このことは同時に、『存在と時間』以後、このブレイクダウン問題という論点そのものがある仕方で克服されていかざるをえないことをも示唆するだろう。

こうして、本稿の分節は以下のようになる。

第一節 第一六節におけるブレイクダウン状況——『存在と時間』第一六節の議論をあらためて検討し、ブレイクダウン問題についての従来のそれとは異なる新しい解釈の可能性を提示する。

第二節 第四〇節におけるブレイクダウン状況——『存在と時間』第四〇節を手がかりにしながら、上述の解釈が『存在と時間』という著作全体の議論の流れに照らしても正当であることを明確にする。

第三節 『存在と時間』以後のブレイクダウン状況——以上の議論にもとづいて、ブレイクダウン問題が孕む問題点を示し、その『存在と時間』以後における解決の試みを概観する。

考察の範囲は主として『存在と時間』に限定されるが、必要に応じてその前後に公にされた諸論考 (著作や講義) にもそのつどふれることにする。

## 第一節 第一六節におけるブレイクダウン状況

ハイデガーは『存在と時間』第一六節で、道具が壊れている・足りない・余計なものになっているという三つのケースをブレイクダウン状況の例としてあげている。そのいずれにおいても、使えなくなった道具は正常に機能していたと

きとは対照的に「目立つてくる (auffallen)」(73)。

この道具の特異な現出について、ハイデガーは二つの興味深い所見を提示している。まず第一に、そのように道具が機能しなくなるにつれて、当の道具においては道具一般の存在様式である手許性 (Zuhandeneit) にかわって、たんなる事物の存在様式であるはずの純粹な目前性 (Vorhandenheit) が表立ってくる (73-76, *passim*)。第二に、そのように道具が使えなくなることを通して、道具を道具として現出させる背景的な地平としての環境世界 (Umwelt) が現存在のままざしに対して明瞭に「閃いてくる (aufleuchten)」(75)。どういふことだろうか。

#### a 手許にあるものの目前性

まず第一の所見から考えてみよう。この所見を提示するに際して、ハイデガーは「手許にあるものの目前性 (die Vorhandenheit des Zuhandenen)」(74) という、彼自身の完成された術語体系からすれば破格としか言いようがない表現すら用いている。すでに序論でもふれたように、従来の読み方においては、この特異な目前性は、特定の用途のために正常に機能することを妨げられた道具が、純粹な自然物を典型とするたんなる事物へと変様していく際の中間段階として解釈されることが多かった。このような解釈がもとになって、ブレイクダウン状況はしばしば存在についての非本来的な理解の派生を説明するような事態として引き合いに出されてきたのである。

とはいえ、『存在と時間』においては、目前性は通常、環境世界がとびこされる (überspringen) こと、つまり道具との交渉が滞りなく機能しえているがゆえにかえって忘却されることにおいて現われる (65, 99f.)。それに対して、第一六節における目前性は、環境世界がその破綻によって閃くこと、つまりあからさまに現前してくることにおいて見出される。このように存在論的な履歴からして正反対のあり方を、たんに同一方向にならべて程度の差として解釈することには——たとえハイデガーがいずれの事態をも同じく「非世界化 (Entweltlichung)」と呼んでいるという事実を考

慮に入れたとしても (65, 75) ——無理があるのではないだろうか。

ハイデガー自身はどのように考えているのか。じつは、ハイデガーがブレイクダウン状況を取り上げるのは『存在と時間』が初めてではない。たとえば、彼は一九二五年夏季講義において、何かが足りないときには「環境 (Umggebung) が〔中略〕その現前性において押し迫ってくる」(PGZ256) こと、したがって何かが存在することは「環境世界の出会われにおいて卓越した役割を果たす」(PGZ256) ことを指摘している。<sup>(5)</sup> ところで、この出会われ方が存在についての非本来的な理解が生じる機縁になるのであれば、この指摘に先立ってハイデガー自身が、ブレイクダウン状況においては道具は「本来的に現在するに至る (eigentlich präsent werden)」(PGZ255) と述べている事実を、どのように理解すればよいのか分からなくなってしまふ。

また、ハイデガーは以上の指摘から、ただちに「配慮された世界としての道具的な環境世界に特有の手許性は非手許性 (Unzuhandenheit) において構成される」(PGZ256) という結論を予想している。ここで問題になっているのは、あくまで手許性 (と非手許性) であって目前性ではないことに注意しよう。このことは、ハイデガーがブレイクダウン状況の分析においてまさに存在と無との (ここでは手許性と非手許性との) 相属を問題にしていること、またそもそもブレイクダウン状況において見出される (『存在と時間』によれば) 目前性が、じつは何らかの意味で手許性そのものが本来的に露出・現前したものに他ならないことを示唆している。

実際、道具は何らかの理由で使えなくなっても、決して単純に道具であること、あろうとすることそれ自体を放棄してしまうわけではない。そうでなくては、ハイデガーが言うような、使えなくなった道具がそれでもしつこく押し迫ってくる (aufdringlich) といった事態はありえないだろう (33)。たとえば、何かを忘れてきたために予定していた仕事ができなくなったとき、私たちはとりあえず手近にあるものだけで可能な仕事を——仕事をやめて帰るといった選択をも含めて——探そうとしないだろうか。ハイデガーによれば、このとき手近にある道具は「依然としてそこにありつ

対処を要求するものの存在」(24)において出会われる。このような道具の道具としての執拗な存在感こそ、ハイデガーが「その頑固な目前性」(25)という言葉にまわしによって表現しようとした事柄ではないだろうか。

たしかに、そこにはハイデガーの通常の語法にはそぐわないような明白な術語上の混乱がある。しかし、具体的な用途を失いながらも、なお執拗に対処を迫りつつ厳然としてあるような道具の存在を言い表わすのに、目前性以上にふさわしい言葉を見出すことは難しい。また、『存在と時間』以前のハイデガーにおいては、目前性という語は手許性とそれほど厳格には対立せず、場合によってはほぼ存在と交換可能な語として用いられることがある。たとえば、ハイデガーは一九二三年夏学期講義で「このように手許にあること、使えること(Zuhanden, Verfügbar-sein)が(身近に)出会われるものの目前性(Vorhandenheit)をなす」(OHF97)と述べているが、ここで目前性という語を存在という語に置き換えても何の不都合もないことは明らかであろう。<sup>(6)</sup>

以上の解釈が誤りでないとすれば、ハイデガーが手許性を解明するに際して、このような場面(ブレイクダウン状況)の記述を必要とした理由は明らかである。探究されるべき事柄がそれとして自ら現われる固有の場面を特定することとは、現象学を標榜する全ての研究の基本である(26)。道具をめぐるブレイクダウン状況においては、道具は個々具體的な、たとえば金槌の「打つため」といったあり方を失いながらも、なお執拗に「……するため」というあり方へと向かう傾きにおいて出会われている。このことは、道具がそのつどの存在的なあり方においてではなく、そのあり方を先行的に可能にしている存在論的なあり方、つまりここでは手許性そのものへの注視にもとづいて出会われていることを示している。それゆえ、私たちはブレイクダウン状況を、存在者についての存在論的な認識の成立場面として理解しなくてはならないのである。

もっとも、ブレイクダウンという出来事の意味を以上のように解釈するだけでは明らかに不十分である。というのも、そこではブレイクダウン状況は、いわば存在論的な事柄を剥き出しにするために、その否定の衝撃力によって存在的な

事柄を追い散らすという役割をもたされているにすぎないからである。つまり、出来事としてのブレイクダウンは、あらかじめ成立している存在理解を露わにすることはあっても、そのような理解の成立そのものにはじめから関わっているわけではない。比喩的に言うなら、それはときおり遠くから微かに響く車道の喧騒が人気がない建物の一室で作業に没頭している人の気をそらし、かえってその建物全体の静けさへとその人の注意を向けさせるといったことに似ている。この場合、喧騒が静けさをあとからの対比によって際立たせるとは言えても、喧騒が静けさの、ましてや静けさ一般の成立に関わるとは決して言えないだろう。

要するに、ここではまだ存在が原理的にあらかじめ理解されているという事態と、その理解が特定の状況においてことさらに露わになるという事態とが明確に区別されていない。前者のような事態がたとえ潜在的にでもあらかじめ成り立っていないければ、私たちはそもそも個々の存在者にそのつど具体的な仕方で関わることはできないし、また当の理解を特定の機会に明瞭に露出させることもできないだろう。たしかに、ハイデガーはあるところで「一切の積極的なものはとりわけ欠如的なものの方から明らかになる」(GP439)と明言している。しかし、この存在解釈のための一般的な指針は、この段階ではいまだ存在理解そのものの本質に関わるような仕方では正当化されてはいないのである。

## b 環境世界の閃き

以上の問題を念頭においた上で、第二の所見(環境世界の閃き)についての検討に移ることにしよう。ハイデガーによれば、「道具は本質的に『……するためにあるもの(etwas, um zu...)』である」(88)。この道具の存在を構成する「……するため」の連関は、他の諸道具のそれとも複雑にからみあいながらあるまとまった全体をなし、最終的には現在のある特定の存在可能性へと、つまり「……できる(können)」へと帰着する(84)。この現存在の「……できる」を要として展開される「……するため」の連絡関係が環境世界である。この環境世界を現出の地平としてはじめて、道



具が道具として、その手許性において出会われる。道具がつねにその諸可能性において、つまり「役立ち『うる』」、われ『うる』、妨げになり『うる』といったありさまにおいて」(174) 見出されるのも、その存在が現存在の「……できる」と相関的に理解されているからに他ならない(174)。

それゆえ、「……できる」への連絡関係としての環境世界は、そのうちではじめて……するための道具といった存在者を出会わせるものであると同時に、そのあからさまな現前によって、道具が(それが使われ『うる』)ものであるかぎり(は)ただ使われるのではないような多様な仕方でありうることを暴露するものでもある。たとえば、金槌はたいていは片づけられて使われぬし、ときには破損して使えないこともある。環境世界の現前は、存在者がつねに完全にありとはかぎらないことを明白に示すという仕方でのみ生起する。だからこそ、逆に存在者との関わりが滑らかに進行するためには「世界が自らを告知しないこと (das Sich-nicht-melden der Welt)」(75) が必要であるとされるのである。

以上の考察は、前項(a項)でなされた解釈とは違って、手許性についての理解の成立条件に、その否定(つまり非手許性)の可能性を予期することが属していることをよく示している。ハイデガー自身ははっきりとは述べていないが、そこでは先の「一切の積極的なものとはとりわけ欠如的なものの方から明らかになる」という存在解釈の方向づけは、具体的にはおそらく次のような考察の仕方を指示していると考えられる。

そもそも道具があるとはどのようなことか。仮に道具がないとしたら、事態はどうなるのか。答は明らかである。道具がないとき、私たちはその道具があるときにはできた仕事ができなくなる。つまり私たちは、道具があることとないこととの違いを、その道具を用いて何かができることとできないこととの違いとして、あるいはむしろ、そのようなことができるかできないかという違いのうちに示されるような違いとして理解している。この道具の両極端の可能性が理解されることにより、その中間に「多様な存在の諸段階 (eine Mannigfaltigkeit von [...] Stufen des Seins)」(GP433) が可

能的に成立する。道具は……するためにある、この「……するため」は最終的に現存在のある特定の存在可能性へと帰着するという手許性についての説明は、まさにこのような事態を念頭においてなされているのである。

以上のように解釈してはじめて、手許性が道具の存在 (Sein) の規定であって本質 (Wesen) の規定ではないということの意味もはっきりする。

たとえば、ハイデガーは一九二五年夏季期講義で、フッサールのイデア化 (Ideation) の手続きによっては存在者の存在、たとえば色の存在は捉えられないと指摘している。というのも、そこで私は色の *essentia* のみを見て、その *existentia* を、たとえばそれが現実にあれこれの照明のもとであれこれの事物の色であるといった事情を全て度外視するからである (PGZ151)。イデア化においては、「私はどのような色にも、それが色であるかぎりは当の色が存在 (existieren) してもしなくても属するような事柄だけに注目する。私は色の存在 (Existenz) を度外視する」 (PGZ151)。<sup>(7)</sup>

それでは、道具が……のために使われうるということは、当の道具が現実に「存在してもしなくても」言われうるようなことだろうか。明らかにそうではない。というのも、その場にはない道具は使えないからである。何かの仕事に際して「あれが使える」と言う場合、私たちはこの表現によって「あれ」が手許に「ある」と言っているのであって、それ以外ではありえない。それゆえ、手許にあるとは道具があること、存在することそれ自体に属する規定である。たしかに、様々な意味で使えないこと、さらには手許にない (abhanden) ことまで含めて手許にあることの諸様態であるという言い方は正しい (GPZ51)。しかし、それは手許にあることが道具の存在・非存在とは無関係に成り立つ規定であるということではなく、逆に道具の存在の仕方、つまり道具がどのようにあったりなかったりするかについての規定であることを意味している。<sup>(8)</sup>

道具の存在は、道具がそれがいないこととの対比においてどのようにあるかという観点から規定されている。ブレイク

ダウン状況が道具の存在を解釈するための重要な手がかりとして取り上げられるのは、そこではこの道具の存在／非存在の対比の手続きが（理論的・人為的な操作としてではなく、現存在の日常性そのものに潜在する可能性として）表明的に遂行されると考えられているからである。それゆえ、私たちはブレイクダウン状況を、前節で述べたのとは違った、より限定された意味においても存在論的であるような認識の成立場面として理解することができる。というのも、そこで私たちは、道具がまさに（ないのではなく）あることそのこととまなざしを向けているからである。

こうして、ブレイクダウン状況は、存在理解を妨げるどころか、手許性についての明示的な理解を獲得するために呼び出された卓越した場面であることが明らかになる。このような場面を、存在と無との相属という根源的な事態の日常性における雛型として提示することが、『存在と時間』第一六節の根本的な意図であったと考えられる。

以上の解釈は、『存在と時間』という著作全体の議論の流れに照らしても正当化されうる。このことを示すために、次節では『存在と時間』第四〇節を手がかりにしながら、この著作の主題である現存在分析論そのものが、不安という「究極のブレイクダウン状況」（ドレイファス）を現象的な地盤として成り立っていることを明らかにしよう。

## 第二節 第四〇節におけるブレイクダウン状況

よく知られているように、『存在と時間』は存在一般の意味を明らかにすることを課題にしているが、その既刊部分においては人間の、つまり現存在の存在である実存 (Existenz) を説明することに終始している。現存在の存在構造を気づかい (Sorge) として明らかにするために、その第四〇節は不安という気分を、つまりハイデガーの術語で言えば根本状態性 (Grundbefindlichkeit) を分析の俎上にのせる。この不安による開示を、私たちはやはり現存在についての存在論的な認識の成立場面として解釈することができる。このことを、単独化 (Vereinzelung) と単純化 (Vereinfachung) という、不安が現存在を開示する二つの様式に即して明らかにしてみよう。

a 不安における単独化の意味

不安に襲われた現存在は、他の一切の存在者との関わりを解かれて自己自身へと向きなおられる。この事態をハイデガーは現存在の単独化と呼ぶが (187-191, *passim*)、これは他の全ての存在者に背を向けて孤立した自己へと閉じこもることを意味しない。このことはハイデガー自身によって明言されているにも関わらず (188c)、ここにあってハイデガーのいわゆる独我論についての見解を読み込もうとする解釈者は少なくない (序論で述べたように、ハイデガーの主要な業績を日常性のプラグマティズム的な諸分析に見る解釈者にとっては、ハイデガー自身は当の独我論に対する強力な批判者として現われる)。ハイデガー自身の「実存論的『独我論』」(188) といった表現がその傾向を助長していることは確かであるが、その内実は文字どおりの独我論とは明らかに異なっている。

たとえば、ハイデガーによれば、不安は現存在を「可能な決断の気分へと」(34c) 引き入れ、状況へ向けての決断の瞬間を積極的に「跳躍に臨ませる (auf den Sprung halten)」(34d)。それゆえ、現存在は不安においても世界内存在というあり方を手放してしまわなければならないし、道具がブレイクダウン状況においてもなお使われることを要求しつづけたように、現存在の存在は現存在自身に事実に世界の内存在することを要求せずにはいないのである。世界内存在は、形式的にそのようにありさえすれば具体的な内容はあってもなくてもかまわないようなたんなる枠組みではない。このように、個々具体的な存在可能性から切り離されながら、ただ依然として存在するというそれだけの理由でなお世界内存在することを執拗に要求されるとき、そこで唯一理解されているのは、世界の内存在するとはそもそも何を意味するかということ以外ではない。<sup>(9)</sup>

それゆえ、むしろ不安においては、現存在が存在者に関わる個々具体的なあり方がいわばカッコに入れられて、そのようなあり方を成り立たしめているより上位の存在態勢が、つまり「他人とともに、存在者のもとに」という世界内存在

在としてのあり方そのものが表立ってくるのである。実際、このようなあり方が、あるいはそれがそもそもどのようなことなのか、あらかじめ現存在自身に対して開示され、理解可能になっているのでなければ、私たちはそのつどの場面において（他人であれ道具であれ）他の存在者に適切な仕方に関わることなどできないし、また哲学者としてそのような存在態勢についての分析的な記述をことさらに遂行することもできないだろう。

不安が現存在分析論において方法的に重視されるのは、それが現存在の存在的事柄への没頭を解除し、その背景に横たわる世界内存在そのものについての存在論的な理解を明瞭に見えるようにするからである。ここから顧みるならば、ブレイクダウン状況における目前性の現出は、この「不安においては端的に世界内存在そのものが開示される」という事態に、世界内部の存在者の側で、日常性の範囲において対応する事態であったことになる。もっとも、このことは同時に、不安についてのこれまでの記述が、道具の目前性の現出をめぐる記述と同じ不十分さを含んでいることをも示唆している（第一節a項参照）。この不十分さは、次の不安における単純化の記述によって補われるべきである。

**b 不安における単純化の意味**

ハイデガーによれば、不安においては「それに面して不安であるもの（das Wovor der Angst）」と、「そのために、それを案じて不安であるもの（das Worum der Angst）」とが同一の世界内存在として一致する。このような事態を、ハイデガーは先の単純化に対して、現存在の単純化と呼んでいる<sup>(10)</sup>。その際、この単純化は気づかひの解明が満たすべき第一の、それどころかただ一つの方法上の要請として取り上げられているにも関わらず——気づかひの析出という課題をはじめて提示する『存在と時間』第三九節には、そもそも単独化という言葉は登場しないにも関わらず——単独化に比べて注目されることがきわめて少ない<sup>(11)</sup>。

不安は、たとえば恐れが特定の恐ろしいものを恐れるように、特定の存在者に面して不安であるのではない。また、

このことに対応して、不安は現存在の特定の存在可能性のために、その可能性を案じて不安であるものでもない。むしろ、不安において現存在が面しているのは、存在者一般が現出するための地平としての世界そのもの、あるいはそのような世界の内に現存在が存在するという事実そのものである(187c)。また、そこで現存在が案じているのも、自らの個々具体的な存在可能性ではなく、そもそも世界の内に存在しうる(in der Welt sein können)という全体的な可能性なのである(187f.)。

それゆえ、「それに面して不安であるもの」と「そのために、それを案じて不安であるもの」との相違は、同一の世界内存在が「……に面して(vor…)」という仕方で見出されるか、「……のために(um…)」という仕方で見出されるかという、同じ一つの(selbig, S. 188) 事柄に対する関わり方の相違にすぎない。ここでは世界内存在が、現存在がそれに直面すべき事柄であると同時に、それを案じて脅かされうる可能な事柄でもあるという仕方を受け取られている。「それに面して不安であるものは被投的な世界内存在(das geworfene In-der-Welt-sein)である。そのため、それを案じて不安であるものは世界内存在可能(das In-der-Welt-sein-können)である」(191)。つまりここでは、現存在は「事実に実存する世界内存在(faktisch existierendes In-der-Welt-sein)」(191)というまとまった仕方方で単純に開示されているのである(191)。

これが「現存在は決して事実にある以上にあるのではない」(195)という、現存在の可能性についてのハイデガーの主張を現象的に裏づける事柄であることに注意しよう。現存在は自らの既成の現実性に、さらに加えて可能性をもつのではない。むしろ、他でもありうるという仕方ではじめから可能的にある者だけが、すでに動かしがたい一個の事実として自らを受け取ることができるのである。一九二五年冬学期講義の言葉を借りるなら、現存在は「つねにすでに何らかの仕方で決定された可能性(immer schon so oder so entschiedene Möglichkeit)」(LFW414)である。不安においては、事実にあるのも可能的にあるのも同じ一つの世界内存在である。そこでは事実性と実存性が同一の事柄の二

つの側面として等しく根源的 (Eichursprunglich) に成り立っており、気づかいにおける「実存性と事実性の存在論的な統一性」(28) が世界内存在の全幅にわたって開示されている。

この不安における事実性と実存性の統一は、不安が本質的に死の不安であることを考慮に入れてはじめて理解可能になる。というのも、現存在は死に面することにより、個々の存在可能性への没頭から引き離されて単独化されつつ、さらに「そもそも現存在は『存在する』のであって『無いのではない』」(PGZ103) という事態そのものに向き合わされることになるからである。そこでは現存在は、自らが存在するという厳然たる事実を、同時に無でもありうる可能的な事柄として理解する。このことは、世界内存在を構成する事実性―実存性といった形式的な諸構造、つまり実存囀 (Existenzialien) が、現存在の無である死の可能性との対立からのみ分節され、形成されてきたものであることを示している。不安は現存在を独我論的な自己へと追い込むどころか、むしろ世界内存在としてのあり方そのものをはじめて可能にするのである。

それゆえ、不安にもとづく認識は、現存在がまさに (ないこととの対比で) どのようにあるかを明らかにするという意味で存在論的な認識である。というのも、そこで見て取られる諸形式 (実存囀) は、現存在がそのようにあるのであればたんにないようなあり方として、現存在があることそのことにただちに属するような形式だからである。だからこそ、ハイデガーは『存在と時間』の本論冒頭において、「この存在者 (現存在) の『本質』はそれが存在すること (sein Zu-sein) にある。<sup>(12)</sup> この存在者が何であるか (essentia) は (中略) その存在 (existentia) から把握されなくてはならない」(42) と述べたのである。現存在の諸構造が現存在の本質 (Wesen) ではなく、存在 (Sein) である理由もここにある。

以上の考察から、ブレイクダウン問題が『存在と時間』においてどのような位置を占めるかが明らかになった。『存

在と時間』においては、存在者の存在は一貫してその否定や欠如から、それらとの表明的な対比を通して解釈されている。とりわけ、現存在の本来的な開示の基礎は、自己自身の死に関わる現存在の「究極のブレイクダウン状況」(ドレイファス)にある。まさにこのことが、現存在分析論を、あることそのこととしての実存に関わるという意味で存在論的な認識であらしめているのである。一般に、存在者の存在論的な、つまりその存在にア・プリオリに属する構造と見なされてよいのは、その存在者が自らの無との端的な対立からのみ受け取ってくるようなあり方だけである。第一六節におけるブレイクダウン問題も、『存在と時間』を貫くそのような考察手続きが世界内部の存在者に適用された一事例として理解されるべきなのである。<sup>(13)</sup>

それゆえ、第一六節のブレイクダウン状況をたんなる目前性の生成場面としてのみ理解し、『存在と時間』の後半をたんに無視するか、または前半から一方的に読み解くような、ドレイファスに代表されるタイプの解釈は、個々の論点については別に判断を要するとしても、基本的には誤りであると私は思う。むしろ、私たちはそのような解釈傾向とは反対に、『存在と時間』の前半を表明的に後半の光のもとで読まなくてはならない。ハイデガーの思想が存在の思想であるのは、彼がつねに存在と無との相属という根源的な事態から全ての事柄を考えていたからである。このことを考慮の外におくならば、私たちはハイデガーの哲学的な洞察の多くを見失うことになるだろう。

### 第三節 『存在と時間』以後のブレイクダウン状況

もっとも、存在と無との関係をめぐるとの時期のハイデガーの考察には、明らかに大きな欠陥がある。この欠陥の所在と、そのハイデガー自身による克服の試みをあわせて検討しておこう。



a ブレイクダウン問題の限界

以上の考察から見た場合、『存在と時間』という著作の最大の欠陥は、存在と無との相属という事態がテキストの上に明瞭に現われてこないことにある（その意味では、以上の解釈は解釈の常として、テキストに明示的に書かれている事柄をいくらかはみ出していることになる）。この欠陥は具体的には、ハイデガーが様々な議論の要所にさしかかるたびにくり返し無の問題を提起しているにも関わらず、この問題提起をさしあたり考慮に入れなくても『存在と時間』の叙述がおおよそ理解できてしまうという形をとる。

たとえば、ハイデガーは気づかいの解明に不安の分析を先行させるが、そのような分析を経由する必要があるにあってたのか。たしかに、ハイデガーは「自らを可能性へと企投する」「自らに固有な存在可能 (Seinkönnen) へと自由にかかれてある」という現存在の存在態勢を根源的・具体的に示すのは不安であると述べており、そこから気づかいの一構成要素である「自らに先立ってある (Sich-vorweg-sein)」が定式化されるといふ体裁になっている (191c)。しかし、この定式化のプロセスをよく吟味すればすぐに分かるように、その内実は結局のところ、現存在が自らの可能性に関わること、その意味で「つねにすでに『自らを超えて (über sich hinaus)』存在する」(192) ことをあらためて確認しているだけである。たんにそれだけのことならば、不安の分析を待たずとも、理解や企投について論じた『存在と時間』第三一節ですでに出揃っているのではないか。

『存在と時間』全体の叙述についても似たような問題を指摘できる。すなわち、気づかいからその意味としての時間性 (Zeitlichkeit) へと遡るために、何故に『存在と時間』の後半における死や良心の分析が必要なのか。死への先駆 (Vorlaufen) や覚悟性 (Entschlossenheit) といった極端な現象を参照しなくても、たとえば「自らに先立ってある」から将来 (Zukunft) という時間性の構成分肢へと遡ることに、それほど無理があるとは思われない。実際、一九二七年夏学期講義においては、ハイデガー自身が死や良心にふれることなく、じつに簡素な仕方で時間性を導き出している

——すなわち、現存在は自らの存在可能に関わるかぎり「自分自身に先立ってある。ある一つの可能性を予期しつつ (einer Möglichkeit gewärtig)」、私はこの可能性から私自身がそれであるところのものへと到来する (zukommen)」（GP375）<sup>14</sup>。つまり現存在は将来的 (zukünftig) に存在する、と。

このことは、「現存在が存在するとはどのようなことか」という問と、「その存在はどこで、どのように開示されるか」という問とが、少なくとも叙述の上では無関係に考えられていることを示している。ここにドレイファス流の、『存在と時間』の後半を削除するという一見、強引な解釈がそれなりに説得力をもつ理由がある<sup>15</sup>。

このような問題が『存在と時間』の叙述に生じた理由は明らかであると思う。ハイデガーは『存在と時間』で、現存在分析論は現存在の日常的な無差別相 (Indifferenz) から出発すると述べている (43)。この方針のもとでは、たとえば死への先駆は、さしあたり死とは無関係に確定された気づかいの構造にもとづいて、この気づかいの (極端ではあるが) ある特定の一樣態として記述されることになる。死は現存在の存在構造の分節や形成にはじめから関わるような仕方では理解されない。道具の問題に限ってみても、事情はほとんど同じである。というのも、ここではブレイクダウンは、まず道具が正常に存在したあとで特定の機会に生じるような事実的な出来事としてのみ解釈されているからである。こうして、実存であれ手許性であれ、存在理解そのものの成立条件に無の理解 (cf. KPM284) を組み入れるという課題は、『存在と時間』においては果たされずに終わったのである。

ハイデガー自身がこの問題を意識していたことは間違いない。というのも、彼は一九二七年夏学期講義で次のように問うているからである——すなわち、道具におけるブレイクダウン状況の時的 (temporal) な意味を現在性 (Präsenz) から不在性 (Absenz) への時間地平の否定的変様として解釈する場合、「この存在の構造」ここでは手許性の構造のうちに否定的な要素 (ein negatives Moment) が必ずしも構成されていないのは何故なのか」(GP42) と。ここでハイデガーは、正常に存在する道具にあとから生じる事実的な出来事としてのブレイクダウンから出発するかぎ

り、否定や無が存在の本質そのものにはじめから属しているという事態が見えにくくなることをはつきりと認めている。つまりそこでは、そもそも何故に存在が否定されるのか、そこに含まれる「否定的な要素」がどこからやってくるのか、全く分からなくなってしまうのである (GP442f.)。

b ブレイクダウン問題の克服

『存在と時間』以後、一九二〇年代のハイデガーの一連の論考のうちに、以上の問題点を解消するためのいくつかの試みを見出すことができる。死や無のような欠如的な事柄は、存在認識一般の可能性の制約にはじめから属するようなものとして表明的に理解されなくてはならない。このことを、この時期のハイデガーの考察の最初と最後に位置する一九二七年夏学期講義と、一九二九年のフライブルク大学就任講演『形而上学とは何か』を手がかりとして簡単に確認しておこう。

すでに見たように、一九二七年夏学期講義は、時間性の析出に際してそもそも死という現象に言及しない。だからこそ、この講義は一見、『存在と時間』から死に関わる記述を削除し、存在の問の圏域から総じて無の問題を追放することを正当化するように思われたのである。とはいえ、じつは事実には正反対であって、この講義における数少ない死への言及は、まさに存在理解一般の成立条件が問われる当所において現われる。

すなわち、ハイデガーはこの講義のある個所で、存在者が存在へと、存在が時間へと企投されるといふ企投の系列を想定することは無限遡行に陥るのではないかという問に対し、時間性はそもそも「……へと企投する」ということ自体を可能にするものであるから、それ自身はもはや他の何ものへも企投されない端的な自己企投 (Selbstentwurf schlecht-hin) であると答えている (GP437, cf. GP396f.)。この自己企投という概念がカントの自己触発 (Selbstaffektion) とはう概念に関わることは明らかであるが、今はその問題にはふれない。むしろ重要なのは、ここでハイデガーが、この無

限遡行の問題に対処するためには、つまり時間性の地平において企投の系列が終わり (Ende) に達すると言いうるためには、時間の有限性 (Endlichkeit) の問題に立ち入る必要があると述べていることである (GP437)。

この時間の有限性の問題をめぐってハイデガーが論じているのは、要するに存在一般が理解されるという事態そのものの成立条件である。というのも、時間が企投系列の終わりとして、つまり他の何ものをも参照することなく、それだけで理解可能なものとして自らを開示し、提示するのだから、そもそも存在を時間へと企投すること自体が不可能になってしまうからである。ところで、ハイデガーは同じ一九二七年夏学期講義で、上述の時間の有限性が「死という難しい問題に関わる」(GP387) ことを指摘している。つまり、ハイデガーはこの講義において、死をあらかじめ存在理解一般の可能性の制約そのものに属する本質的な構成要素としてあらためて解釈しなおそうとしているのである<sup>(16)</sup>。

もちろん、実存という特殊な存在の欠如である死と、存在一般の欠如である(したがって存在一般の理解可能性に関わる) 無とを安易に同一視することはできない。死と無の関係をどのように考えるかという問題は、死が人間の死であり、かつ無が存在認識一般の可能性の制約に関わるかぎり、どのようにして人間の——カント的に言えば——「自然的素質 (Naturanlage)」(Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, B21) に形而上学 (Metaphysik) が属するかという大問題に結びつく。とはいえ、ここではこの問題に深入りすることは避け、死は存在者からの離別であるがゆえに、存在者ではないもの、つまり無の経験を可能にするという、後年のハイデガー自身による指摘を参照するにとどめておく (ZS230)。

『形而上学とは何か』の検討に移ろう。ハイデガーはこの講演で、存在と無との相属の問題をはじめて正面から取り上げている。存在者は不安において、総じて「崩落寸前 (hinfallig)」(Wml13) になる。つまり、「不安は無を開示する」(Wml13)。この無がはじめて、存在者を無ではないもの、存在するものとして明白に露わにするのである。この事態を、ハイデガーはごく簡潔に次のように表現する。すなわち、「不安の無い夜においてはじめて、存在者が

存在者として根源的に開かれるということが、つまり「存在者が存在する——無ではない (und nicht Nichts)」ということが起こる」(Wm114)と。

このよく知られた個所に続けて、ハイデガーは周到に、この「無ではない」はあとからのつけたしではなく、「存在者一般の開示性を先行的に可能にすること (die vorgängige Ermöglichung)」(Wm114) であること述べている。つまり、ここでハイデガーは、無の開示をあとからの対比においてではなく、はじめからそれへの言及なくしてはそもそも存在一般の開示可能性が理解されえないような事柄として解釈しているのである。「無は決して存在者の対立概念を提供するものではなく、存在そのものの本質に根源的に属している」(Wm115)。そこでは人間も、この無の開示との関わりにおいて、特定の実存的な変様においてではなく、はじめから「無のための場所の保持者 (der Platzhalter des Nichts)」(Wm115) であるような存在者として規定されることになる。

また、一九二七年夏学期講義で問われた「否定的な要素」の起源も、この「存在の本質に無が属する」という根源的な事態に求められる。「『ない』(Nicht) は否定の操作 (Vernichtung) によって生じるのではない。むしろ、否定の操作の方が『ない』にもとづいて成り立つのであり、他方、この『ない』そのものは無が無化する事 (Das Nichten des Nichts) から発源するのである」(Wm116f.)。ここでハイデガーは、無の開示に浸透された、しかもたんなる論理的な否定の操作よりもさらに実践的に深刻な現存在のふるまいとして、「反駁」「嫌悪」「拒絶」「禁止」「欠乏」をあげている (Wm117)。これらは全て広い意味でのブレイクダウン状況であるが、それらはもはや存在にあとから無や否定を突きつけるのではなく、むしろはじめから存在の本質に無が属するからこそ可能であるような出来事として理解されている。

この到達点からふり返って見るならば、『存在と時間』はどのような著作として位置づけられることになるだろうか。ハイデガーによれば、上述のような無の開示にはじめから関わっていること、つまり彼自身の言葉を借りるなら「無

に引き入れられていること (Hineingehaltenheit in das Nichts) (Wml15) が、現存在が存在者全体 (Seiendes im Ganzen) を存在者でないものと超え出る「超越 (Transzendenz)」(Wml15) の運動を可能にする。ハイデガーにとっては、カントのいわゆる超越論的哲学 (die transzendente Philosophie) も、それが存在論の基礎づけとして解釈されるかぎりには、この意味での超越から捉えなおされなくてはならぬのである (Wml139f, cf. KPM238)。

「超越論的」や「可能性の制約」といったカント的な術語が多用されていることから分かるように、『存在と時間』がカント哲学の強烈な影響下にあることは明らかである。たとえば、ハイデガーはカントの『純粹理性批判』を論じた一九二七年冬学期講義において次のように述べている。「数年前に『純粹理性批判』をあらためて研究し、いわばフッサール現象学を背景にして読んだとき、まるで目からうろこが落ちるような思いをした。そして、カントは私にとって、私の探究の道筋の正しさを本質的な意味で確認してくれる人になったのである」(PKK32)。「存在と時間」が成立するためにはカントとの批判的な対話が不可欠であった。それはハイデガー自身の存在の問が明確に超越論的哲学としての骨格を獲得していく過程でもあったはずである。

とはいえ、すでに見たように、『存在と時間』は無の開示を存在理解へと有機的に関係づけることに成功していない。そうだとすれば、じつは『存在と時間』は、存在の問を上述の、ハイデガー的に捉えなおされた意味での超越論的な問として確立することに失敗している途上の作品であることになる。ハイデガー自身が示唆するように、無の問は存在の問がどれほどの水準で問われているかを測る格好の指標になる (Wml19f)。この指標から判断するかぎり、超越論的哲学としてのハイデガー思想の頂点は、しばしば言われるように『存在と時間』にあるのではなく、その二年後の『形而上学とは何か』(に代表される作品群<sup>17)</sup>)にあるのである。

結 論

本稿の課題は、『存在と時間』を手がかりにしながら、ハイデガールの存在思想においてブレイクダウン状況（存在者との関わりが何らかの意味でうまくいかなくなる事態）が取り上げられる意味を明らかにすることであった。

まず第一節において、私は『存在と時間』第一六節で取り上げられる道具をめぐるブレイクダウン状況を、存在（ここでは手許性）についての本来的な理解が成立するような範例的な場面として解釈することを提案した。また、このような解釈が首尾一貫したものになるのは、当のブレイクダウン状況を存在と無との相属という根本的な事態の、いわば日常性における雛型として理解するかぎりにおいてであることを指摘した。

続く第二節において、私は『存在と時間』第四〇節を手がかりとしながら、この著作全体の主題である現存在分析論そのものが、死の不安という現存在にとつての「究極のブレイクダウン状況」（ドレイファス）に依拠して成り立っていることを明らかにした。この第四〇節の議論は第一六節におけるブレイクダウン問題の取り扱いきわめて正確に対応しており、第一六節の議論をめぐる先の提案が『存在と時間』全体の議論の流れに照らししても正当化されうることによく示すものになっている。

考察を一般化するならば、以上の結論は存在認識、とりわけカテゴリー的な事柄に関わる認識の本性を理解する上で重要な意味をもつと考えられる。「一切の積極的なものはとりわけ欠如的なものの方から明らかになる」というハイデガールの提案は、カテゴリー的なものがつねにその種の「欠如的なもの」との対比において、あることに属する存在の規定として解釈されうるといふ主張を含んでいる。そのような対比において分節・形成されるものとだけが、ア・プリオリな存在認識の本来の主題でありうるのである。

もっとも、私は第三節において、『存在と時間』におけるブレイクダウン問題の取り扱いが、存在と無との相属とい

う言い当てられるべき事柄そのものに照らして不十分であることを指摘した。日常的な無差別相から出発するという『存在と時間』の方針は、それなりの動機と正当性を有してはいるが、どうかすると『存在と時間』の論述全体に、「欠如的なもの」への言及なしに現存在の存在が記述できるかのような外観を与えてしまう。手許性の記述にしても、道具のブレイクダウンが道具の存在にあとから生じる出来事として理解されているかぎり、やはり同じような外観をまわざるをえない。

このことは、『存在と時間』以後、ある意味でブレイクダウン状況における存在認識の成立という発想そのものが次第に修正、または克服されていかざるをえないことを示唆している。実際、この方向性は『存在と時間』以後、一九二〇年代に公にされたハイデガーの一連の論考のうちにはっきりと現われている。そこでは、死や無のような「欠如的なもの」は、存在認識一般の可能性の制約にはじめから関わるような仕方では捉えなおされる。この捉えなおしを通過してはじめて、ハイデガーの存在の問は、存在者全体を存在者でないものへと超え出る超越論的な問として確立されることになるのである。

以上の考察から、ブレイクダウン問題は、その趣旨においては「存在と無との相属」という存在の問にとって核心的な事態の一つを指示し、またその限界においては『存在と時間』期のハイデガーの思考の動きを「超越論的な問としての存在の問」という観点から照らし出す、きわめて射程の長い論点であると結論することができるよう思われる。

もっとも、私が『存在と時間』以後のハイデガーの思考の動きについて与えた概観（第三節り項）は、きわめて不十分なものである。とりわけ、私はそこで「存在と無とは相属する」という洞察を、「存在は時間からその意味を受け取る」というハイデガーのもう一つの根本的な着想に関係づけようとはしなかった。

すでに述べたように、一九二七年夏学期講義は、存在を時間へと企投することが成り立つための可能性の制約に死が関わることを指摘していた。また、この講義は——これまでであえて触れなかったが——例のブレイクダウン状況にお



る「否定的な要素」の起源を時間性のうちに求め (GP42f)。<sup>87</sup>あの「一切の積極的なものはとりわけ欠如的なものの方から明らかになる」という考察の指針それ自体が、その妥当性の根拠を「時間性の本質と、時間性に根ざす否定 (Negation) の本質とのうちに」 (GP43g) 有していることを示唆している。

否定や無と時間性との関わりは、この時期のハイデガーの他の諸論考においてもくり返し言及されている。たとえば、一九二八年夏学期講義は、時間性の時熟 (Zeitigung) において成り立つ世界地平こそが根源的な無 (nihil originarium) であると語る (MAL271f.)。また、一九二九年の公刊著作『カントと形而上学の問題』によれば、一般に存在者を出会わせるためには総じて何かを対象的に対立させる働き (das Gegenstehenlassen von...) が必要であるが、それは現存在が自らを無に引き入れること (ein Sichhineinhalten in das Nichts) であると同時に、純粹自己触発としての時間によって可能になるような働きなのである (KPM72, 189f.)。

要するに、この時期のハイデガーは、「存在と無」という洞察を「存在と時間」という問題設定のうちに有機的に組み入れようと努力しているのである。たしかに、その試みの多くが断片的な記述やたんなる示唆に終わっていることは否定できない。その理由を明らかにするためには、この時期のハイデガーの思考の動きを、広い範囲にわたってより詳細に検討する必要があるだろう。この点については別の機会に稿をあらためて論じること<sup>(87)</sup>にしたい。

注

- (1) Hubert L. Dreyfus, *Being-in-the-World - A Commentary on Heidegger's Being and Time, Division I*, ninth printing, Cambridge MA: The MIT Press, 2001, p.243.
- (2) *Ibid.*
- (3) *Ibid.*, p.246.
- (4) Carl Friedrich Gethmann, "Heideggers Konzeption des Handelns in Sein und Zeit", in: Annemarie Gethmann-Siefert

und Otto Poggler [Hrsg.], *Heidegger und die praktische Philosophie*, 2. Aufl., Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1989, S.161.

(5) ここで言う環境、または環境世界とは、『存在と時間』の術語で言えば世界内部の存在者 (innerweltliches Seiendes) のことである。この講義においては、ハイデガーはまだ存在者の現出の場である世界 (Welt) と、そこで現出する存在者の総体である引用符つきの「世界」(Welt) との区別 (GS) を明確に行っていない。むしろ、ここでは世界は出会われ方 (Wie) 込みで考えられた存在者を意味しており、そのような存在者の存在性格が世界性 (Welchkeit) と呼ばれている (PGZ227f.)。

(6) これは決して例外的な語法ではない。むしろ、この時期のハイデガーには、存在者の存在に形式的に言及する場面にさしかかるたびにこの語 (目前性、目前にあること) を用いる傾向がある。たとえば、一九二四年冬学期講義のアリストテレス解釈では、「生あるものが真に目前にあるとはどのようなあり方か」という趣旨の問がくり返し提起される。「ここで問題になっているのは、まさに生あるものが本来的に目前にあること (das eigentliche Vorhandensein)」、その現前性である」(PS176)。また、『存在と時間』以後においても、一九二八年夏学期講義には「自然が事実に目前にあること (das faktische Vorhandensein)」(MAL199) という表現が見出される。もちろん、この自然は翌年の講演『形而上学とは何か』における存在者全体 (Seiendes im Ganzen) に相当するのであって、典型的には自然科学の対象になるようなたんなる事物の総体ではない。

(7) それゆえ、ハイデガーによれば、イデア化の手続きは「その何であるか (Was) がまさに存在すること (zu sein) であってそれ以外ではないような」(PGZ152) 存在者には通用しない。もちろん、このイデア化が通用しない存在者とは現存在のことに他ならない。

(8) ハイデガーは一九二四年冬学期講義で、プラトンにおいては、存在の意味は「作る (poiein)」、つまり「存在しないものを存在へともたらず (again eis ousian)」(cf. Platon, *Sophistes*, 219b4 sq) というふるまじと相關的に理解されていたという見解を示している。また、この「存在 (ousia) へともたらず」を、ハイデガーはむしろ——ousiaの日常的な語義 (所有物・財産など) を参照しながら——「日常的な生のために使えるようにする (in die Verfügbarkeit stellen)」(PS269) とも言い換えている。それゆえ、ハイデガーによれば、プラトンにおいては「存在する (Sein) とは使えること (Zur-Verfügung-Stehen) を意味する」(PS270) のである。

プラトン解釈の枠内においてはではあるが、この議論は、使われうるといふことが(ないことと対比された意味での) あることそのことの規定であることをよく示している。というのも、ここでは、存在しないものを「存在へともたらず」ことと、その存在し

ないものを「使えるようにする」ことが、同一の事柄として考えられているからである。

(9) 具体的に何をすることが規定されないままに、存在者に面してただ何かをすることそのことへと促されることはありうる。むしろ、本質的に何をするかのような促しにさらされた存在者であるからこそ、私たちはそのつどの場面において個々具体的にすべきことを見出すことができるし、また見出さずにはいられないのである。たとえば、退屈な気分が襲われるとき、私たちをいらだたせるのはまさにそのような促しである。また、後年のハイデガーは、仕事熱心な人が退職後に鬱に陥るといった精神病理学的な現象のうちに、そのような促しがそれ自体で際立ってくるありさまを見て取っている。このような病態に陥る人は、具体的に何をするかについての一切の規定を奪われたまま、ただ何かをするという要求だけを過剰に被り、追いつめられていくのである (ZS187)。

ちなみに、「この促しの無規定性 (Unbestimmtheit) が覚悟性 (Entschlossenheit) のそれ (298) に、たとえ同一ではないとしても密接に関わることは明らかである (ここでは頽落 (Verfallen) の問題は考慮に入れない。Cf. ZS180)。また、それは人間がカント的な意味で当為 (Sollen) に関心をもたずにはいられないという事実には本質的に属するような無規定性でもある。「何をすべきか」と問う者は、自分がつねに「何をすべきなのかをそれ自体としては未だ無規定な要求を未だ満たしていないこと (Noch-nicht eines selbst noch unbestimmten Erfüllens)」(KPM216) を知っている (これが『存在と時間』で言うところの責め (Schuld) であろう)。紙幅の都合上、くわしく論じることができないが、このような論点への通路を提供しようところにも、ブレイクダウン問題が蔵する長大な射程をうかがうことができる。

(10) この単純化の意味をハイデガー自身がこのように明確に説明しているわけではないが、仮にこの解釈が誤りであったとしても、以下の私の議論の妥当性には全く影響しないと思う。なお、『存在と時間』では「それに面して……」と「そのために……」だけでなく、「不安になることそのこと (das Sichängsten selbst)」も世界内存在の一樣態として他の二要素と同一であることが指摘されているが (188)、ここでは論じない。

(11) 「それに面して……」と「そのために……」の一致という論点は、『存在と時間』の後半における良心 (Gewissen) の分析にも形を変えて登場する。良心の呼び声においては呼び返しと呼び出し先が同じ現存在であるという論点がそれである (380)。なお、良心現象が現存在分析論において果たす役割については、拙論「存在認識と良心——ハイデガー『存在と時間』における良心論」(京都宗教学会編『宗教学哲学研究』一八号、北樹出版、二〇〇一年、三三—四八頁) を参照。

(12) この“Zu-sein”が「関わる存在」などではなく、たんに「存在すること」を意味することは、essentia と existentia を対立させる後続の文脈からして明らかであると思う。後年のハイデガー自身による注記も、「……しなくてはならない」という当為や負荷のニュアンスを強調した点を除けば、この解釈を支持している(42, Randbemerkung b)。やはり本稿の注(7)をも参照。

よなみに、「存在と時間」の二つの英語訳は、この“Zu-sein”を「to be」と訳して「Being and Time, trans. by J. Maguarrie & E. Robinson, Oxford: Blackwell, 1998 (first edition 1962), p. 67; Being and Time, trans. by J. Stambaugh, Albany: State University of New York Press, 1996, p. 39.

(13) 厳密には、現存在と他の存在者とは存在と無との関わり方に違いがある。前者は相属、つまり存在と無との取り集めそのものを自らの存在とするがゆえに、開示されていなければそもそも無であるが、後者は現存在の実存によって相属の場を与えられなくても、その存在において開示(発見)されただけで、存在しないわけではない(cf. PK19)。

(14) 既在性(Gewesenheit)や現在(Gegenwart)についてはGP375ff.を参照。

(15) これほど極端ではなくても、「存在と時間」の前半と後半の間に何らかの断絶を見る解釈はドレイファス以前にも存在した。たとえば、木田元『現象学』(岩波書店、一九八五年)九一一―九二頁を参照。

(16) 細川亮一は、この一九二七年夏学期講義における時間の有限性は、『存在と時間』で死との連関において提示された時間性の有限性(329ff.)とは区別されなくてはならないと述べている(細川亮一『意味・真理・場所』創文社、一九九二年、二七三頁)。しかし、ハイデガー自身が同じ講義で時間の有限性と死との連関を明確に指摘している以上、両者が無関係であるとは考えられない。

(17) ここで私が念頭においているのは、講演『形而上学とは何か』(Wm103-122)とともた『道標』(Wm)に収録された論文『根拠の本質について』(Wm123-175)と、単独の著作として刊行された『カントと形而上学の問題』(KPM)である(いずれも公にされたのは一九二九年である)。

(18) 存在と無との相属という事態と時間性との関わりを明らかにする有力な試みとしては、仲原孝「ハイデガー思想における存在と無の同一性」(京都宗教学会編『宗教学研究』二二号、北樹出版、一九九五年、四〇―五六頁)がある。

文献・その他

使用したハイデガーの文献と、その略号は以下の通り (Ga. = *Gesamtausgabe*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1975-)。  
なお、引用の際には原文における強調は全て省略した。

- *Sein und Zeit*, 17. Aufl., Tübingen, 1993. (番号を用いなかっただ)
- GP *Grundprobleme der Phänomenologie*, Ga. Bd. 24, 1975.
- KPM *Kant und das Problem der Metaphysik*, Ga. Bd. 3, 1991.
- LFW *Logik. Die Frage nach der Wahrheit*, Ga. Bd. 21, 1976.
- MAL *Metaphysische Anfangsgründe der Logik im Ausgang von Leibniz*, Ga. Bd. 26, 2. Aufl., 1990.
- OHF *Ontologie (Hermeneutik der Faktizität)*, Ga. Bd. 63, 1988.
- PGZ *Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs*, Ga. Bd. 20, 1979.
- PIK *Phänomenologische Interpretation von Kants Kritik der reinen Vernunft*, Ga. Bd. 25, 3. Aufl., 1995.
- PS *Platon: Sophistes*, Ga. Bd. 19, Frankfurt am Main, 1992.
- Wm *Wegmarken*, Ga. Bd. 9, Frankfurt am Main, 1976.
- ZS *Zollhoner Seminare*, hrsg. von Medard Boss, 2. Aufl., Frankfurt am Main, 1994.

(筆者 さいとう・なつき 大阪外国語大学非常勤講師／宗教学)

maturity of hypothetical imperative is inextricable from the binding force of categorical imperative, and therefore we must presuppose the existence of categorical imperative if we are to comprehend the normative status that hypothetical imperative exerts on us, which point both defenders and critics of Kant have been failing to take into account.

---

“Breakdown Condition”  
vom Zusammenhang zwischen Sein und Nichts  
in M. Heideggers *Sein und Zeit*

von

Naoki MATSUMOTO

Dozent für Philosophie

an der Osaka University of Foreign Studies

In *Sein und Zeit* analysiert Heidegger die Situation, in der das uns zunächst stehende Seiende, d. h. das Zeug den Dienst versagt, die englischsprachige Forscher oft “breakdown (=Zusammenbruch) condition” nennen. Heidegger behauptet, am in einer solchen Situation unverwendbar gewordenen Zeug trete die Zeughaftigkeit des Zeugs, d. h. die Zuhandenheit in den Hintergrund, und statt dieser komme die pure “Vorhandenheit des Zuhandenen” zum Vorschein.

Diese eigentümliche Vorhandenheit wird meist interpretiert als die Zwischenstufe der Modifikation von der Zuhandenheit zu *derjenigen* puren Vorhandenheit, die sich typischerweise im nur hinsehenden “theoretischen” Verhalten des Daseins zeigt. Dagegen schlage ich in diesem Aufsatz eine andere Interpretation vor: nämlich daß diese Vorhandenheit die ausdrücklich gesehene Zuhandenheit selbst ist. Nach dieser Interpretation soll die “condition” als diejenige verstanden werden, in der sich die ontologische Erkenntnis über die Zuhandenheit als solche konstituiert.

Diese Interpretation wird vom ganzen Denkprozeß der Daseinsanalytik selbst in *Sein und Zeit*, vor allem aber durch die Analyse des Phänomens der Angst bestätigt. In der Angst als Todesangst wird das Dasein vor sein eigenes Nichts gebracht und in seiner eigentlichen Seinsart erschlossen. Im Hintergrund dieses Befundes steht die Grundeinsicht Heideggers, daß nur im Zusammenhang mit dem Nichts so etwas wie Sein überhaupt verständlich werden kann, d. h. daß Sein und Nichts zusammengehören. Dann muß auch die “Vorhandenheit des Zuhandenen”

als das im Bereich des alltäglichen Besorgens eigentlich vom Nichts her (d. h. hier von der Unzuhandenheit her) verstandene Sein (d. h. als Zuhandenheit) interpretiert werden.

Ich versuche aber auch zu zeigen, daß Heidegger in *Sein und Zeit* die besagte Einsicht nicht hinreichend entwickelt. Das bedeutet, daß Heidegger, insofern das Sichbringen vor das Nichts nichts anderes ist als das Transzendieren des Seienden, seine eigene Seinsfrage noch nicht - wie in der späteren Periode - als die "transzendente" festlegen kann. Hier liegt der Grund dafür, daß die vielen Interpreten die "breakdown condition" mißverstehen als diejenige "condition", in der sich das abkünftige Verstehen der puren Vorhandenheit konstituiert, und daß in gewisser Weise die Problematik der "breakdown condition" von Heidegger selbst überwunden wird.